

公益社団法人 日本動物学会 平成 27 年度 第 4 回理事会
議事録(案)

1.開催された日時 平成 28 年 6 月 10 日 (金) 13 : 00-17 : 25

2.開催された場所 北海道大学東京オフィス

3 理事総数及び定足数

総数 18 名 定足数 9 名

4 出席理事数 12 名

(出席) 山下正兼、出口竜作、武田洋幸、竹井祥郎、沼田英治、倉谷 滋、富岡憲治、尾崎浩一、小泉修、佐藤矩行、筒井和義、井口泰泉

(欠席者) 稲葉一男、窪川かおる、高畑雅一、田村宏治、蟻川謙太郎、浅見崇比呂、
(監事出席) 長濱嘉孝、阿形清和

(1) 報告事項

会長報告 (武田)

1. Zoological Science 編集長を現在、深津武馬会員にお願いをしているが、当初 2 年の約束であったが、もう 1 年の延長をお願いしたところ、快諾を頂いた。本来であれば、審議事項であるが、ここで理事の皆さまにご意見を伺いたい。問題がないようであればもう一年、編集業務の続行をお願いしたい。
理事からは異議がなく、深津会員の 1 年続行が決定した。
2. 3 月 14 日に JSPS において、昨年申請を提出した新刊 OA ジャーナル支援に関してプレゼンを行った。会長、阿形前会長、倉谷編集長の 3 人で出席した。その結果ほぼ満額で 5 年採択を受けることができた。
3. 国際動物学会議に関しては、参加者の増加が最も重要な点であるので、理事の皆さまには、研究者に参加を促すようお声をかけていただきたい。また、「学生会員で発表を行い 11 月 14 日の国際会議初日から参加の場合は、参加費 1 万円を返し、無料にする」という提案をお認めいただき、ありがとうございます。企業出展や寄付にも力を入れていきたいところである。

国際会議 (佐藤理事)

Opening lecture は Oxford University の Peter Holland が受けてくれることになった。

部屋の収容人数には、多少ばらつきがあるが、調整をして、より良くしていきたい。

11 月 14 日は午後 2 時から受付を開始したいと考えている。

長濱監事

美ら海水族館で、11 月 14 日 16 : 00 からシンポジウムを開催する。動物学会に後援をお願いしたいということですので、よろしくお願ひします。

会計報告 (出口)

1.平成 28 年度支部活動費に関しては、資料にお示ししている通り、平成 27 年度昨年 6 月未決算に示された各支部の支部費金額を 7 月第一週に各支部へ振り替えを行う。

Zoological Science 編集報告（深津編集長）

資料にお示ししている通りの状況ですが、編集長判断でリジェクトを行うようにしている。著者の方にお待たせをしない、別の雑誌への投稿を促せることもあつての意図である。その上で、受付から出版までの期間も短縮されている。また、ZS は投稿時に ORCID の記入ができるようにした。ORCID の説明は、この後、事務局長から願います。

（深津編集長が、理事ではないため、審議事項の前に退席するため、ここで平成 28 年度論文賞の審議を行った。）

資料を示し、審議を行った結果、平成 28 年度論文賞は以下の 6 編と決定された。

Phylogeography of Semiterrestrial Isopod, *Tylos granuliferus*, on East Asian Coasts

Miyuki Niikura, Masanao Honda and Kensuke Yahata

Zoological Science 32(1): 105-113

Chironomid Midges (Diptera, Chironomidae) Show Extremely Small Genome Sizes

Richard Cornette, Oleg Gusev, Yuichi Nakahara, Sachiko Shimura, Takahiro Kikawada and Takashi Okuda

Zoological Science 32(3): 248-254

Molecular Cloning of cDNA Encoding an Aquaglyceroporin, AQP-h9, in the Japanese Tree Frog, *Hyla japonica*: Possible Roles of AQP-h9 in Freeze Tolerance

Atsushi Hirota, Yu Takiya, Joe Sakamoto, Nobuyoshi Shiojiri, Masakazu Suzuki, Shigeyasu Tanaka and Reiko Okada

Zoological Science 32(3): 296-306

Effects of Visual Cues of a Moving Model Predator on Body Patterns in Cuttlefish *Sepia pharaonis*

Kohei Okamoto, Akira Mori and Yuzuru Ikeda

Zoological Science 32(4): 336-344

Fine Structure of the Integumentary Cuticles and Alimentary Tissues of Pycnophyid Kinorhynchs *Pycnophyes oshoroensis* and *Kinorhynchus yushini* (Kinorhyncha, Homalorhagida)

Euichi Hirose and Hiroshi Yamasaki

Zoological Science 32(4): 389-395

Sexual Dimorphisms of Appendicular Musculoskeletal Morphology Related to Social Display in Cuban Anolis Lizards

Wataru Anzai, Antonio Cádiz and Hideki Endo

Zoological Science 32(5): 438-446

事務局長

ORCID について、PPT で 5 分説明を行った。

Zoological Letters 編集長（倉谷理事）

BMC から提出された Marketing report April.2016 の説明を行い、実際には、編集報告をお願いしていたが、今回は間に合わなかったため、私から説明をする。

今あるデータからは、ZL 論文は引用されているが、IF を取得することが必須であるので、この点を BMC とは相談をしていきたいと考えている。

UniBio Press からの購読料返還について(事務局長)

ZS が隔月刊になったことで、論文数は約 3 割減少した。そのため、BioOne からの購読料も 3 割は減少するものと考えていたが、実際には、減らず、ZS 各論文へのアクセスは順調で、720 万円ほどの購読料返還となった。もっともアクセスを受けた論文は、阿形先生の論文であり、昨年も同様な結果となっている。また、PDF ダウンロード数では、昨年を超えるかなりのダウンロード数を示すなど、購読料の返還と共に順調な状況であることをお伝えしたい。

富山大会について（井口中部支部長）

次年度の富山大会は、富山大学を中心に 2017 年 9 月 20 日（水）～23 日（土）に県民会館で開催予定。

北海道大会について（山下北海道支部長）

2018 年度北海道大会は、一般講演はポスターのみとして札幌コンベンションセンターで、2018 年 9 月 13 日から 15 日まで開催の予定。前日に開催される理事会等は、北海道大学で開催する。

各理事報告

北海道支部（山下理事）

3 月 22 日 日本動物学会北海道支部第 564 回支部講演会の開催: 矢崎-杉山 陽子博士 (OIST 沖縄科学技術大学院大学) 演題: Early auditory experience shapes neuronal circuits to form auditory memories in zebra finch song learning.

5 月 13 日 2016 年度北海道支部大会を 8 月 27 日に旭川医科大学で開催することを決定し、支部会員に通知した。

近畿支部報告（倉谷理事）

5 月 14 日 近畿支部委員会の開催・近畿支部春季研究発表会の開催（大阪大学）

中国四国支部報告（富岡）

平成 28 年 5 月 14 日（土）～15 日（日）に、米子市米子コンベンションセンタービッグシップにて、中国四国支部大会を開催した。演題数 32 であった。このほかに、高校生ポスター発表 40 件と公開講演会「中国地方の希少動植物とその保全」を植物学会および生態学会中国四国支部と合同で開催した。動物学会員の参加者は約 50 名であった。

平成 28 年 5 月 14 日（土）に、米子市米子コンベンションセンタービッグシップにて、中国四国支部役員会を開催し、支部の事業計画、予算等について審議した。

平成 28 年 5 月 15 日（日）に米子市米子コンベンションセンタービッグシップにて、中国四国支部総会を開催し、支部の事業計画、予算等について審議した。

九州支部報告（小泉）

5 月 16 日 九州支部常任委員会開催

5 月の支部委員会・支部総会に向けて審議・準備

5 月 28 日～5 月 29 日 三学会（動物・植物・生態）九州支部合同大会開催：鹿児島大学にて行われ、ポスター発表（高校生も含む）、特別講演、一般発表（口演）を行う。83 名（+α、当日参加）参加による。

5 月 28 日 九州支部委員会、九州支部総会開催

合同大会において、標記の会を開催した。

図書委員会（浅見理事が欠席のため、沼田副会長が代読した）

4 月 12 日 Springer シリーズ第 1 巻（種多様性）査読が済み、内容について、理事に確認のメールを送信した。

将来計画委員会（沼田）

4～5 月 キャリアパスに対する今後の対応について継続審議中。

広報委員会（高畑理事が欠席のため、山下理事が代読した）

4 月国際会議HPの修正、追加等

学会賞等応募のための受付口を動物学会HPに作成した

ニュースレターの送信

5 月国際会議HPの修正、追加等

ニュースレターの送信

国際交流委員会（稲葉理事が欠席のため、沼田副会長が代読した）

4 月シンポジウムオーガナイザーとタイトル、講演者等についてやりとりを行った。

賞等選考委員会（竹井）

5 月 6 日に OM 賞選考委員会（真行寺委員長）による選考会議があり、最終候補者が決定した。5 月 21 日に学会賞等選考委員会（井口委員長）による選考会議があり、日本動物学会賞、奨励賞および教育賞の最終候補者が決定した。6 月 7 日には、日本学術振興会・育志賞の候補者を、財団等推薦者選考委員会がメール審議により選考した。また、本年度より文部科学大臣表彰科学技術賞と若手科学者賞受賞候補者を学会から推

薦することとなった。

ZDW委員会（浅見理事欠席のため、出口理事が代読した）

科研費申請書提出にあたり、阿形、片倉、嶋田委員とメールでの討議を行った

教育委員会（尾崎理事）

5月14日 高校生ポスター発表

場所：米子コンベンションセンタービッグシップ

（鳥取県米子市）

内容：生物系三学会中国四国支部大会鳥取大会における

高校生ポスター発表

発表数：16題（動物分野）（他に植物分野17題、生態・環境分野13題）

参加者数：52名（動物学会）（他に植物学会64名、生態学会48名）

5月28日 高校生による研究発表会

場所：鹿児島大学群元キャンパス理学部2号館

内容：三学会合同鹿児島大会における高校生ポスター発表

発表数：8題

参加者数：95名（高校生、引率教員、大会参加者を含む）

IT委員会（蟻川理事欠席のため、沼田副会長が代読した）

4月19日 午前10時-10時27分 web会議を開催し、国際会議参加登録、及び演題登録システムの最終チェック等を委員で行った。参加者 阿部秀樹、吉田学、成瀬清、吉井大志、若林憲一、永井裕子、広瀬裕一

5月の登録開始をめざし、ほぼ毎日、委員がシステムのチェック、ダミーデータによるシステム動作の確認を行った

5月24日参加登録を開始した。

(2) 審議事項

第一号議案 今後の川口賞の運営について

沼田副会長から、江上基金終了に伴い、次期から、川口賞だけが若手国際会議支援となるとし、案が提案された。国際会議で発表をし、また11月14日からの会議に参加をする大学院生支援に川口賞からその参加費分を補てんするため、例年のような川口賞募集は行わない。来年は、3月から翌年2月までの国際会議を対象とし、1月には公募を出す。今後は年1回の公募となるという説明に、理事全員、賛同した。

第二号議案 平成28年度公益社団法人 日本動物学会事業計画（案）について

沼田副会長から、計画案は資料として示され、例年通りとなるが、平成28年は動物学会創設130年を越えてはじめての国際動物学会議の開催があり、この点は重要である旨が説明

された。尾崎理事から、委員会活動に係わる件で、今の委員は、もう1年委員を継続するののかという質問があった。沼田副会長から、3月に開催された理事会で、窪川理事が提案された、「委員会委員長が退任理事であった場合は、オブザーバー等で委員会に出席し、委員会活動を継続して行うことにしていかがかと」という案が否決された。従って、現在の委員は、次年度まで継続をお願いしたい。議案については、理事全員一致で賛成となり、議案は可決された。

第三号議案 平成28年度公益社団法人 日本動物学会予算（案）について

出口会計幹事から、説明が行われた。国際会議の収入が大きいことと、学術振興会からの新刊OA刊行支援が大きいため、予算額が増大しているが、これらはすべて支出され。全体としては、例年と変わらない収支予算書となっている。ただ、平成27年度の会費徴収が芳しくないため、次期は100万円を減額した予算書とした。

上記の説明を受け、理事全員賛成し、本議案は可決した。

第四号議案 平成28年度成茂動物科学振興賞について

学会賞等選考委員会委員長井口理事より、以下のような選考理由が述べられた。

本賞の全5名の応募者は、選考規定にある「動物学の全分野でユニークな研究を展開する会員を振興賞の候補者とする」の条件を満たしており、高い水準での選考となった。応募者の研究内容、研究業績、将来の発展性について詳細に審議した結果、以下1名を理事会に推薦することとした。

越川滋行（こしかわ しげゆき）京都大学白眉センター・特定助教

研究テーマ「ミズタマシウジョウバエの模様形成機構と進化」

推薦理由としては、以下の通りである。

越川滋行会員はミズタマシウジョウバエにおいて、トランスポゾンを用いた遺伝子導入技術を開発、それを通じて新しい紋様という進化的新規形質の発現に特異的に機能すると覚しい新しいエンハンサーを同定、さらにそれを活性化するモルフォゲンの分布変化を示すことに成功した。これは表現型進化を駆動する遺伝子制御機構、分子レベルでの作用機序を同定する画期的な成果であり、本賞の受賞者として相応しいと判断した。

審議の結果、提案通り、越川滋行会員の受賞が決議された。

第五号議案 平成28年度日本動物学会教育賞について

選考委員長井口理事より、以下の説明があった。

本賞に推薦された2名は、選考規定にある「動物学の社会への普及に著しく貢献した個人」としての条件を満たしているが、1名は「本賞の候補者は、本学会の会員により推薦された者とする」を満たしていない。以下の理由から、齋藤淳一会員を候補者として理事会に推薦することとした。

齋藤淳一（さいとう じゅんいち）東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭

選考の対象となる活動の名称「日本の高校生物教育を世界標準に近づけるための組み換え

DNA 実験の教育現場への導入と国際生物学オリンピックへの日本参加に対する長年の貢献」齋藤淳一会員は 2001 年より現在に至るまで、筑波大学や東京農工大学の遺伝子実験センター、千葉大学、東京学芸大学、京都教育センターにおいて中高等学校の教員を対象とした教育目的組み換え DNA 実験の講習会を企画・実施し、教育現場で実施できる簡便な分子生物学実験の基礎と実技の指導に加え、教育現場での授業実践のサポートを行ってきた。さらに、2004 年より国際生物学オリンピックの日本委員会の運営メンバーの一人として、日本代表生徒の選抜、特別教育や大会への引率に加え動物の分子細胞生物学的問題の検討と翻訳作業などに熱意を注ぎ、我が国の高校生物教育の発展に貢献してきた。2009 年のつくばでの国際生物学オリンピック大会の日本誘致にも尽力した。以上のように、齋藤淳一会員は、我が国の高校生物教育の現代化と国際オリンピックに多大な貢献をした。

以上の推薦理由を基に、審議を行った結果、推薦通り、齋藤淳一氏の受賞が決定された。

第六号議案 平成 28 年度日本動物学会奨励賞について

井口選考委員長より、本賞の全 6 名の応募者は、選考規程にある「活発な研究活動を行い将来の進歩発展が強く期待される若手研究者」の条件を満たしており、高い水準での選考となった。応募者の研究内容、研究業績、将来の発展性について詳細に審議した結果、以下 3 名（五十音順）を理事会に推薦することとしたと説明があった。

木矢剛知（きや たけとし）金沢大学理工研究域自然システム学系生物学コース・准教授
研究テーマ「神経活動依存的な遺伝子発現を利用した昆虫の生得的行動の神経基盤の解明」
推薦理由

木矢剛智会員は、昆虫を対象として、分子生物学的手法により行動を制御する神経機構の解明を目指した研究を展開している。ミツバチとカイコガで神経活動依存的に発現する最初期遺伝子 kakusei と Hr38 をそれぞれ同定し、これらを利用して活動の生じた神経細胞を可視化する手法を開発した研究は特筆に値する。木矢会員はこの手法を用いて、ミツバチではダンス時に活動する脳領域を特定し、その神経活動が採餌飛行時の視覚経験に依存することなどを明らかにし、また、カイコガやショウジョウバエでは、雌性フェロモンに応答する雄の脳領域を包括的に明らかにするなど、優れた成果を上げている。新規に実験手法を開発し行動のメカニズムにアプローチする木矢会員の研究は高く評価することができ、将来の発展が大いに期待される。

佐藤 淳（さとう じゅん）福山大学生命工学部生物工学科・准教授

研究テーマ「哺乳類の分子系統および日本産哺乳類の起源の解明」

推薦理由

佐藤淳一会員は、長年の謎であったレッサーパンダや齧齧類（アザラシ、アシカ、セイウチ）等の系統学的な位置づけや琉球諸島固有のトゲネズミ、日本固有のアカネズミ及びニホンヤマネの系統学的な位置づけなど、哺乳類の分子系統学的研究を推進するとともに、クロテ

ンやニホンテン等のイタチ類について系統地理学的な研究を展開し、地質学的な要因と生態学的な要因が日本産イタチ類相の形成に大きな役割を果たしたことを明らかにした。また、琉球列島のトゲネズミ、対馬のツシマテン、北海道のクロテンそしてニホンヤマネを対象にして、日本列島に生息する哺乳類の遺伝的固有性及び多様性を評価することで、島に隔離された生物集団の絶滅リスクの評価を行い、哺乳類の保全遺伝学にも貢献した。さらに佐藤会員は、野生ハツカネズミの亜種間交雑に伴い生じたヘモグロビンベータ鎖遺伝子の組換えに関する研究や哺乳類の毛色関連遺伝子の多型に関する研究を行うとともに、鰭脚類の旨味受容体遺伝子が偽遺伝子化していることを発見し、食性や食べ方が偽遺伝子化に関与したという興味深い結果を発表することによって、哺乳類の分子進化学にも貢献した。加えて今後の発展を期待し、佐藤淳会員が日本動物学会奨励賞受賞者として相応しいと判断した。

二階堂雅人（にかいどう まさと）東京工業大学大学院生命理工学研究科生体システム専攻・准教授

研究テーマ「脊椎動物の多様性獲得に関わる分子メカニズム解明」

推薦理由

二階堂雅人会員は一貫して、脊椎動物の系統関係や適応進化機構を DNA レベルで探求し、これまでその成果は教科書や図鑑の改訂を促し、それを通じて世に広く知られるに至っている。二階堂会員はまず、散在性反復配列（SINE）の挿入パターンから、クジラにもっとも近縁である現存種がカバであることを発見、さらに多くの哺乳類の系統的関係に関して一連の重要な成果を報告してきた。さらに、二階堂会員は東アフリカ産シクリッドに注目し、フェロモン受容体遺伝子が過去に強い自然選択を受けたことを示した。生物多様性の遺伝的背景を明らかにした一連の研究成果を鑑み、加えて今後の発展を期待し、二階堂雅人会員が日本動物学会奨励賞受賞者として相応しいと判断した。

上記の説明を受けて、沼田副会長から、「2人ではなく、3人として理由を教えてください」と質問があった。井口委員長は、「2人にどうしても絞ることができず、この3人に奨励賞をとることになった」と説明があった。議案は、委員会の推薦通り、3人に奨励賞を授与することが決定した。

第七号議案 平成 28 年度動物学会賞について

井口委員長から、以下の説明があった。

本賞の全 4 名の応募者は、動物学の多様な領域を代表する優れた研究者であり、選考規程にある「学術上甚だ有益で動物学の進歩発展に重要かつ顕著な貢献をなす業績をあげた研究者」の条件を満たしていた。応募者の研究内容、研究業績、動物学の進歩発展への貢献度について詳細に審議した結果、以下 1 名を理事会に推薦することとした。なお、学会賞

選考規程がすでに受賞した人を選考の対象としているかどうかについての議論があったことが報告された。

中村正久（なかむら まさひさ）早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究テーマ「両生類の生殖腺分化に関する研究」

推薦理由

中村正久会員は2つの性決定様式(XY型とZW型)をもつ野生のツチガエルの生殖腺の雄化にはアンドロゲン受容体(AR)遺伝子とステロイドホルモン合成酵素遺伝子が関わることを明らかにするとともに、両生類で初めて染色体マッピングを行いツチガエルの雌雄判定DNAマーカーを見出した。さらに、AR遺伝子は性染色体にあり、Z染色体のZ-ARは正常に発現するがW染色体のW-ARは転写領域に多くの変異があるため殆ど発現しないので、Z-AR遺伝子はツチガエルの雄化に有利であることを明らかにした。次いで、Z-AR遺伝子を雌(ZW)胚に導入した結果、雌の性が不完全ではあるが転換して卵精巣を形成し、脊椎動物でAR遺伝子が性決定に深く関わっていることを世界で初めて明らかにした。また、生殖腺分化の仕組みの解明には3次元構築が必須であることも見出した。両生類の生殖腺分化の研究において世界をリードする研究を一貫して行い生殖内分泌学分野の発展に多大な貢献をした中村正久会員の功績は、日本動物学会学会賞にふさわしいと判断した。

上記の説明を受け、審議した結果、推薦通り、中村正久会員に動物学会賞を授与することが決定された。

第八号議案 感謝状の贈呈について

近畿支部長である倉谷理事が、推薦文を資料として提出、説明を行った。補足説明を前近畿支部長である沼田理事が行い、「長く近畿支部の学生会員を中心とする若手の英語能力の向上に貢献してきた中島エリザベスさんに感謝状を贈呈したい。とりわけ、近畿支部会での講演およびその内容をもとにした小冊子の配布、販売における貢献は大きい。その収入をもとに、今後さらに学生会員の英文校正をお願いすることになっている」この説明を受け、中島エリザベスさんへの感謝状贈呈が決議された。

第九号議案 名誉会員の推薦について

推薦者である竹井理事が、推薦書に基づいて説明を行った。その後、出席理事で投票を行い、賛成多数で菊山栄会員の名誉会員への推薦が決定された。

第十号議案 平成28年度監事候補者の推薦

武田会長より、以下の説明があった。「次期総会8月6日には、新理事と監事の承認が行われるが、監事規程に則り、この理事会で、新監事の候補者を推薦し、理事の皆さまにお認めいただく必要があります。本会は、会長が監事となる慣例があり、この点はやはりおかしいのではないかと公益化に向けての討議では話し合いがあったが、もっとも会の運営を

知る会長が監事となるのは悪くないこと、また外部に適任者がいなかったこともあり、これを踏襲しています。大変おかしなことですが、次期の監事は、私、武田とまた本来の継続される阿形監事が、理事となられたため、沼田副会長に監事をお願いしたいという提案です」という説明がされた。公益社団化が落ち着いた段階で、外部の適任者を検討してはいかがかという意見も出され、今回は会長の提案通り、新監事は決議された。決議後、沼田副会長から、理事が監事となり、その監事が理事に復帰するような事態が続かないようにしてほしいと意見が出された。

第十一号議案 平成 28 年度日本動物学会女性研究者奨励OM賞について

真行寺選考委員長から、以下の説明がなされた。

選考委員会は、真行寺千佳子（東京大学）、福井彰雅（北海道大学）、渡辺絵理子（山形大学）、松田学（筑波大学）、沓掛磨也子（産総研）、岡田令子（静岡大学）、本川雅治（京都大学）、竹内秀明（岡山大学）、香月美穂（福岡大学）の9名の選考委員により構成され、選考会議には、昨年度委員長であった窪川かおる氏（東京大学）が、オブザーバーとして参加されました。授与候補者は、各委員による事前の書面審査、および5月6日（金）に東京大学理学部2号館の323号室において選考委員全員が出席して開催された選考会議により決定されました。選考会議では、書面審査に基づく評価を参考にしながら、11名の応募者について授与候補者となりうるかを審議しました。OM賞の趣旨に基づき重視したのは、優れた動物科学の研究を推進しているだけでなく、安定した身分で研究を続けることが困難であるにもかかわらず強い意志と高い志を持って研究を継続しているか、という点です。特に、研究者としての独立性や研究姿勢、研究の取り組み方、将来性にそのような意志が反映されているかを丁寧に審議しました。

その結果、下記の通り2名の候補者を理事会に推薦することとしました。

記

授与候補者の氏名、所属、職および、「研究テーマ」

太田 茜（おおた あかね）

甲南大学大学院自然科学研究科生物科学専攻 学振 RPD、非常勤講師
「線虫の温度適応の制御機構」

高浪景子（たかなみけいこ）

岡山大学大学院自然科学研究科牛窓臨海実験所 学振 RPD
「痒みの進化とその生物学的意義の解明」

推薦理由

今回の応募者11名の研究内容はいずれも優れたものであり、申請書からはそれぞれの応募者の強い研究意欲を感じることができました。その中でも、候補者の太田氏と高浪氏の

研究には、際立った独創性が感じられ、その成果は高く評価されました。

候補者の太田茜氏は、手首骨の切断手術で一時右手が使えなくなるなどの困難に直面した際も、また、第1子の出産育児の間も研究活動を継続し、線虫を用いた環境温度応答の分子生理学的解析において、光感知ニューロンによる温度受容、3量体Gタンパク質による温度情報の伝達などを明らかにするという優れた業績を上げています。現在まだ学振の研究員（RPD）という不安定な立場にあり、かつ第2子の出産を控えていますが、研究に対する情熱を常に失うことなく、計画的にマイナス面を最小限にとどめ克服しようとしており、その研究姿勢が高く評価されました。

また、もう一人の候補者の高浪景子氏は、物理工学、生命科学、医学分野で学び、現在では特に電子顕微鏡の最先端技術を習得して、その研究の幅を広げるだけでなく、深く掘り下げる努力をなさっています。痒み感覚の進化の理解を目指して、感覚の閾値制御を分子（遺伝子）・形態・行動レベルで捉えるという優れた業績を上げています。研究に常に新手法を積極的に取り入れるだけでなく、研究対象となる動物の種類を進化の視点で広げようとしている点も意欲的です。出産に際して思いもかけない病気と闘うこととなり、非正規雇用のために産休も取れずに頑張り抜かなければならなかったという、女性が研究を継続することの難しさを強靱な精神で乗り越え、優れた研究業績をあげています。直面する困難はあっても研究への情熱、意欲、責任感を持ち続け、強い意気込みで研究の継続のために努力している点が高く評価されました。

審議を行った結果、理事満場一致で、推薦通り、OM賞受賞者が決定された。

なお、真行寺委員長から、今後のOM賞について、以下のような提案がなされた。

1. 受賞タイトルの変更をお願いしたい。
2. 広報の方法も含め、OM賞に関して、説明文を含め改訂を行いたい。
3. 委員長や委員の選出について

上記については、次期理事会での審議とすることとなった。

第十二号議案 その他

○2017年度生命科学系学会合同年次大会について

生物科学学会連合に出席していた竹井理事が「協賛の場合、協力するだけで資金の支援はいらない。サテライトでシンポジウムなどしてほしいのではないだろうか」と説明した。協賛の可能性を残して、このまま様子を見守ることになった。

○就業規則の整備について

就業規則の整備はできなかったが、以下の原則を決定した。

1. 公益社団法人日本動物学会の就業規則を、他学会のものなどを参考にして速やかに決定する。
2. 職員の定年は満60歳とし、定年に達した日以後における最初の3月31日をもって自然退職とする。

3. 定年退職した職員の再雇用については任期を1年とし、更新を可とするが、任期は満65歳に達する日以後における最初の3月31日以前でなければならない。
4. 現事務局長については、定年は満65歳とし、定年を迎えた日以後における最初の3月31日をもって自然退職とする。

上記の内容で相違ないことを証するため、ここに記名押印をする。

平成28年6月10日

議長 武田 洋幸

議事録署名人 長濱 嘉孝

議事録署名人 阿形 清和